

柏瀬 和弥（かしわせ・なごみ） 湘南白百合学園高等学校 2年
作品名 キチジロー
読んだ作品 『沈黙』

『沈黙』。それはキリスト教徒への迫害が厳しくなされている日本へ渡航した司祭が、酷い状況下でも神の沈黙が続くことにより信仰することなどについて考えていくストーリーである。

この本の中で印象に残った言葉がある。それは司祭に告悔しに来たキチジローが叫んだ「踏絵をば俺が悦んで踏んだとも思っとつとか。踏んだこの足は痛か。」という言葉だ。

この言葉について考えていくと、キチジローも立派な信徒であったのだと思われた。確かにキチジローは澳門で司祭に会ったときに信徒ではないと言って正直に神への信仰を示すことができなかったり、絵踏みの際に他の信徒はためらった絵踏みをしてしまったりなど神を深く信仰しているのならば取らないと思われるであろう行動を取りがちであった。だからといってキチジローが全く神を信仰していないということではないと示されたのがこの言葉であった。その場その場で一番自分が楽な行動の選択を取ってしまったという神への罪悪感や後悔を一人抱えて日々葛藤しながら過ごしていたのだと察することができる。

私も自分が被害を被らないようになるべく楽な選択を取ることがある。私は神を信仰しているわけではないけれど、このような場合には「何故より善い選択ができなかったのだろう。」と後々まで後悔を引きずって過ごす。またそのような行動を繰り返すことによって、毎回「自分は心を強く持てない弱い人間なんだ。」と認識して辛くなる。キチジローはこの思いに加えて、信仰している神の教えに背いてしまったという強い後悔もあるのだろうかと思うと苦しくて苦しくて仕方がなくなる。

私はこのキチジローの抱いたであろう感情の中で、善くないとわかっていてもなお繰り返してしまい「自分は弱い人間だ。」と嘆き、後悔する感情がよく理解できると思う。その後悔は毎年定期的に訪れ、夏休み終盤に差し掛かった今も抱えているものであり、毎回の長期休暇で「宿題を早く終わらせて自分の能力向上のために有意義な休暇にするべきなのだ。」というものだ。これに共感してくれる人は多いかも知れないが、高校生になり将来の夢が明確になっても行動を起こせずに毎回同じことを繰り返して成長のできない自分は本当に嫌になってしまう。この後悔によって「やっぱり自分は努力のできないダメな人間だ。勉強しても意味がないんだ。」と卑屈になりその期間もダラダラとし、自分にとって良いとは思えない生活が続く。この感情が終わるのは試験期間が始まって焦りが生じたらである。なので大体休暇中の一ヶ月間と休暇後の一ヶ月間の合計二ヶ月間、それが春、夏、冬の三回あるのでこの自分の行いを後悔するという感情は一年のうちで約半年も私の中にあるということになる。

私はこの感情が生じて、消滅して、を繰り返しているのでもこの感情が自分にどのような悪影響を及ぼしているのかを体感ではあるが比較によって理解していると思う。その悪影響

の中で特に感じるのが、全てにおいて逃げるといふ選択肢を持つということである。「こうした方が善い。こうすべきである。」と頭では理解していても実際行動に移そうとすると「自分にそんなことはできない。違う方法を取ろう。」という考えが過って逃げに走る。そうすると小さな行動でも「善い行動を取れなかった。」という後悔が募っていき、悪循環に陥ってしまう。私は試験前の焦りによって後悔の悪循環が自然に消滅して二ヶ月程はその後悔が再発することなく過ぎせるが、この感情から開放されるタイミングがなくなると後悔の念に苛まれることとなれば、後悔という負の感情によって気が滅入って性格さえも卑屈なものへと変わってしまうのではないかと感じる程だ。

このようにキチジローと同じような種類の感情を抱えている私は、置かれている状況の問題や抱く後悔は軽いが、わかる部分は多くある。キチジローは逃げるといふ選択肢があるにも関わらず、司祭と日本へ行ったり、日本に潜伏する信徒に司祭のことを伝えたりなど善いことだが難しいことを成し遂げた。このことから、作中では弱い人間として描かれてはいるが、神が沈黙を貫くこの時代に神への信仰心を全て捨てるといふ選択肢を取らなかったことを考えると、キチジローは自分の取った行動に対する後悔を胸に抱えながらも神への信仰を忘れずに日々を過ごし抜いた立派な信徒であったのだと感じた。